むゆへに、かしここゝへ行也。女人も亦〈是の如し〉。女人の心をば水に譬たり。心よわくして水の如く也。道理と思事も男のこわき心に値ぬれば、せかれてよしなき方へをもむく。又水に゛がくにとどまらざるが如し。女人は不信を体とするゆへに、只今さあるべしと見る事も、又しばらくあれば、あらぬさまになるなり。仏と申は正直を本とす。故にまがれる女人は仏になるべきにあらず。五障三従と申て、五のさはり三したがふ事あり。されば銀色女経には、「三世の諸仏の眼は大地に落とも、女人は仏になるべからず」と説れ、大論には、「清風はとると云ども、女人の心はとりがたし」と云へり。〈此の如く〉諸経に嫌はれたりし女人を、文殊師利菩薩の妙の一字を説給しかば忽に仏になりき。あまりに不審なりし故に、宝浄世界の多宝仏の第一の弟子智積菩薩・釈迦如来の御弟子の智慧第一の舎利弗尊者、四十余年の大小乗経の意をもつて竜女の仏になるまじき由を難ぜしかども、終に叶はずして仏になりにき。初成道の「能断仏種子」も、双林最後の「一切江河必有回曲」の文も破れぬ。銀色女経並に大論の亀鏡も空しくなりぬ。又智積・舎利弗は舌を巻き、口を閉ぢ、人天大会は歓喜のあまりに掌を合せたりき。是偏に妙の一字の徳也。此南閻浮提の内に二千五百の河あり。一一に皆まがれり。南閻浮提の女人、心のまがれるが如し。但し娑婆耶と申河あり。縄を引はえたるが如くして直に西海に入る。法華経を信ずる女人も亦復〈是の如く〉、直に西方浄土へ入るべし。是妙の一字の徳也。妙者蘇生の義也。蘇生と申はよみがへる義也。譬ば黄鵠の子死せるに、鶴母子安となけば死せる子還て活り、鳩鳥水に入ば魚蚌悉死す。犀角これにふるれば死せる者皆よみがへるが如く、爾前の経経にて仏種をいりて死せる二乗・闡

提・女人等、妙の一字を持ぬればいれる仏種も還て生ずるが如し。天台云、〈「闡提は心有り猶作仏すべし。二乗は智を滅す、心生ずべからず。法華能く治す。復称して妙と為す」〉と云云。妙楽云、〈「但大と名けて妙と名けざるは、一には有心は治し易く無心は治し難し。治し難きを能く治す、所以に妙と称す」〉等云云。此等の文の心は、大方広仏華厳経・大集経・大般若経・大涅槃経等は題目に大の字のみありて妙の字なし。但生者を治して死せる者をば治せず。法華経は死せる者をも治す。故に妙と云ふ釈也。されば諸経にしては仏になるべき者も仏にならず。法華は仏になりがたき者すら尚仏になりぬ。仏になりやすき者は云にや及ぶと云道理立ぬれば、法華経をとかれて後は諸経にをもむく人一人もあるべからず。而に正像二千年すぎて末法に入て、当世の衆生の成仏往生のとげがたき事は、在世の二乗・闡提等にも百千万億倍すぎたる衆生の、観経等の四十余年の経々に値て生死をはなれんと思はいかが。はかなしはかなし。女人は在世・正・像・末、総じて一切の諸仏の一切経の中に法華経をはなれて仏になるべからざる事を、霊山の聴衆として道場開悟し給へる天台智者大師定て云、〈「他経は但男に記して女に記せず、今経は皆記す」〉等云云。釈迦如来・多宝仏・十方諸仏の御前にして、摩竭提国王舎城の艮、霊鷲山と申所にて、八箇年の間説給し法華経を智者大師まのあたり聞しめしけるに、我五十年の一代聖教を説をく事は皆衆生利益のためなり。但し其中に四十二年の経々には女人、仏になるべからずと説き、今法華経にして女人成仏をとくとなのらせ給しを、仏滅後一千五百余年に当て、霊鷲山より東北十万八千里の山海をへだてゝ摩訶尸那と申国あり。震旦国是也。此国に仏の御使として出世し給ひ、天台智者